

319年 252-1/2 2555 410年 2552-1/2 2795 15斤 P
 2510 2556 1169 2825 2552-1/2 2795 15斤 P
 2510 2556 1169 2825 2552-1/2 2795 15斤 P

第四十二章 朝鮮半島の歴史

これまでこまごまと述べてきたように、

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三三一年、高句麗の美川王が死去し、故国

三〇史記(2) 121
平壤 124⁷ 7⁷

三〇史記(2) 121
141¹ 123³
124⁷ 7⁷

2,539^{P-2/3}
三〇史記(2) 123³

丸都城 (中流城)
2552^{P-2/3}
東洋史 145⁷
輯安 大正 世紀 196

355
342
13
改訂

井上秀雄、日本放送出版協会、六九頁。『東洋史辞典』創元新社へ慕容廆・慕容皝・慕容部(参照)

三三四年八月、高句麗は、平壤城を増築した。

(『三国史記』故国原王四年八月条参照)

ただ、平壤城を、丸都城の東方の東

黄城とする説がある。(故国原王十三年七月

条。『三国史記』(2)金富軾、井上秀雄訳注、

東洋文庫、平凡社、一四一頁、注三参照)

三三七年、慕容皝は、みずから燕王と称した。

(『東洋史辞典』創元新社、へ慕容皝参照)

三四二年八月、高句麗王は、居所を丸都城

へ移した。(故国原王十年八月条参照)

同年(三四二)十一月、燕王慕容皝は、高句麗の

首都、丸都城(鴨緑江中流北岸の輯安にあ

った都)を攻め落した。

故国原王は、単騎で断熊谷へ逃げ込んだ。

燕の將軍の慕容廆は、追撃して、故国原王

の生母周氏と王妃とを捕えた。

燕王皝は、故国原王の父、美川王の陵を

奪取した。第二、燕の王孫、箕子朝鮮国の西域(遼寧省あり)を、遠東郡の慕容皝は、みずから燕王と称したと理解される。

355
-343
12

355
-343
12

40km

江界 高句麗 三〇史記(2) 124
142年 2.539^P-3/3

十余年間、の長期にわたって、

とある見解がある。『三國史記』(2) 金富軾、井上秀雄訳注、という。(東洋文庫(四二五) 平凡社、(四二頁) 注二〇参照)

平壤の東黄城を、集安の対岸の江界地方とする見解がある。『三國史記』(2) 金富軾、井上秀雄訳注、という。(東洋文庫(四二五) 平凡社、(四二頁) 注二〇参照)

山の中にある。(故国原王十三年条参照)

燕王は、故国原王の父の尸を返したか、

秋七月、故国原王は、居所を平壤の東黄城へ移した。この城は、いまの西京の東の木覓

高句麗の

三四三年二月、故国原王は、王弟を派遣し、燕の臣と称して朝貢した。そのとき貢納した珍奇なものは千単位で数えるほど多かった。

高句麗の

二年(三四二)十一月条等参照)

母を人質とし、歴代の宝物を奪い、男女五万余人を捕虜とし、その宮殿を焼き、丸都城を毀して帰国した。(『三國史記』 故国原王十

生

2508²⁰⁹¹
2520¹²⁶¹

せんまよ
古抄
1261¹
2541¹ - 1/ 中ニ

2540¹ - 1/3

三國史記(2) 124¹ 2539¹ - 2/3 生母周氏

へ高句麗は、燕に牛耳られ続けた
ようである。

三十五年十二月、高句麗の故国原王は、使者を燕に派遣して人質をおさめ、貢納物を献上し、人質として三十四年十一月以降燕にとどめおかしていた生母の帰国を要請した。
燕王鳥はこれを許し、王母周氏を高句麗まで送りどけさせ、故国原王を征東大將軍・營州刺史とし、樂浪公に封じ、王号は従来どおりにした。(「三國史記」故国原王二

十五年十二月条参照)

ところで、ここに、
燕は、高句麗の故国原王を征東大將軍とし、日樂浪公に封じた。
とあって、興味深く思われる。

燕王鳥は、高句麗王に、帶方郡一帯を統治している百濟の討伐を命じた。
ということなのかも知れない。

もつとも、先に述べたとおり、高句麗は、西晋滅亡直前の三一年に樂浪郡を亡ぼし、三十四年に帶方郡を亡ぼした。

④ 2544^P-3/3 三国史記(2) 313^P
④ 2546^P-4/4 2540^P-3/3

三国史記(2) 125^P
④ 2544^P-3/3

人 2508
2049
侵攻 1147^P

あるいは

第4章 海北の国々の目まぐるしい動向 冒頭において既述

のだった。自らを奪回し、

高句麗王が、遼東郡一帯の地域にさらに再び

百済を属国にしたいと望んだ。このため、高句麗は

突然にも、高句麗は百済への侵攻を開始した

三国史記に高句麗本紀第六、第一八代、

故国原王の三十九年九月条に、

「三十九年(三六九)秋九月、王は二万の

軍隊を率いて南進し、百済と雉壤(黄海

道延白郡銀川面白川)で戦ったが、敗れた

とある。

一方、同書に三国史記に百済本紀第二、

第十三代、近肖古王の二十四年九月十月条には

「二十四年(三六九)秋九月、高句麗王斯

由(故国原王)が、歩兵と騎兵三万人を率い

て、雉壤にきて屯営し、各方面に軍隊を派遣

し、住民を掠奪した。

王は、太子(近仇首王)を派遣し、軍用の

ちかみちを通つて、雉壤に着き、急襲して

高句麗軍を撃破し、五千余級(首)を

得、その捕虜を將士に分け与えた。

(將校と士卒)

白川 韓半島の地図
80km 京城 前頁8行, 15行

えっぺい 関兵 239P

2,540P-3/3

魏志倭人伝 正始6年 245年
8年 247年

ソウル郊外 京の旗 11-394

冬十一月、漢水（京城南郊を西流する漢江）の南に、多くの軍隊を集めて訓練した。このとき、旗幟（軍旗）はみな黄（色）を用いた。

とある。第二章 国王の挿げ替え（黄色の旗参照）

なお、かつて（二四五年に）魏国の天子は倭国に黄幢（黄色の旗）を賜ったのだった。

（「魏志倭人伝」正始六年・八年条参照）

さらに、辛卯年（三三一）以後、百濟は倭国の臣民となったように思われる。（既述）

さらにたわけで、倭国ばかりでなく、倭国の臣民となった百濟も、関兵の際のすべての旗幟（軍旗）に黄色を用いたのかも知れない。

また、近肖古王の二十四年（三六九）九月条の記述から

八日、雉壤（現在の京城の北西約八〇キロ）
黄海道延白郡銀川面白川）は、——三六九

前頁9行

ニと

2,541^{P-1/2}
2540^{-1/2}
2547^{-5/5} 3~644

369 (注) 帯方郡の郡衙はもと北の
355 355
14
新羅ににあった。とい

年当時、百濟の領有地内にあつた。と
と、このことが分かる。と
・更にあえて述べると、後文からみて、
高句麗と百濟との国境は、現在の平壤と
京城との中間くらいのところにあつたの
うう。と
と推察される。 (「三國史記」近肖古王の三
十年七月条参照。後述)
そこで、三六九年九月の高句麗と百濟との
交戦を契機として、
高句麗・百濟間の攻防が、――辛卯年
三九一以降にまでも、ひっきりなしに
延々と続いてゆく。と
ことになる。 (追つて詳述したい)
つまり、
辛卯年(三九一)の頃、高句麗と百濟と
は、徹しく敵対し合つてゐた。と
のだった。と
ともあれ、
辛卯年(三九一)当時、高句麗が百濟を

2,541^p- $\frac{3}{2}$

にくそうに思われる
理解にいく。

②2510^p $\frac{1}{2}$
眠 属民

破り属民と
臣民と
民と
た状況は
考えにく
い
参照
倭国が百濟等を

史料に於ける日本の歩み 20

大王の世紀 156 AM11~PM1 丙午(但丁午の日)

千支物語 112

大王の世紀 156

史料に於ける日本の歩み

大王の世紀 156

2,542

369 24年

346 23

倭の五王

和歌集 153

1411

七支刀 984

倭の五王

藤原大110

たいゆ

太和4年(369)

254

2913

1/2

1/3

1/4

1/5

1/6

1/7

1/8

1/9

1/10

1/11

1/12

1/13

1/14

1/15

1/16

1/17

1/18

1/19

1/20

1/21

1/22

1/23

1/24

1/25

1/26

1/27

1/28

1/29

1/30

1/31

1/32

1/33

1/34

1/35

1/36

1/37

1/38

1/39

1/40

1/41

1/42

1/43

1/44

1/45

1/46

1/47

1/48

1/49

1/50

1/51

1/52

1/53

1/54

1/55

1/56

1/57

1/58

1/59

1/60

1/61

1/62

1/63

1/64

1/65

1/66

1/67

1/68

1/69

1/70

1/71

1/72

1/73

1/74

1/75

1/76

1/77

1/78

1/79

1/80

1/81

1/82

1/83

1/84

1/85

1/86

1/87

1/88

1/89

1/90

1/91

1/92

1/93

1/94

1/95

1/96

1/97

1/98

1/99

1/100

1/101

1/102

1/103

1/104

1/105

1/106

1/107

1/108

1/109

1/110

1/111

1/112

1/113

1/114

1/115

1/116

1/117

1/118

1/119

1/120

1/121

1/122

1/123

1/124

1/125

1/126

1/127

1/128

1/129

1/130

1/131

1/132

1/133

1/134

1/135

1/136

1/137

1/138

1/139

1/140

1/141

1/142

1/143

1/144

1/145

1/146

1/147

1/148

1/149

1/150

1/151

1/152

1/153

1/154

1/155

1/156

1/157

1/158

1/159

1/160

1/161

1/162

1/163

1/164

1/165

1/166

1/167

1/168

1/169

1/170

1/171

1/172

1/173

1/174

1/175

1/176

1/177

1/178

1/179

1/180

1/181

1/182

1/183

1/184

1/185

1/186

1/187

1/188

1/189

1/190

1/191

1/192

1/193

1/194

1/195

1/196

1/197

1/198

1/199

1/200

1/201

1/202

1/203

1/204

1/205

1/206

1/207

1/208

1/209

1/210

1/211

1/212

1/213

1/214

1/215

1/216

1/217

1/218

1/219

1/220

1/221

1/222

1/223

1/224

1/225

1/226

1/227

1/228

1/229

1/230

1/231

1/232

1/233

1/234

1/235

1/236

1/237

1/238

1/239

1/240

1/241

1/242

1/243

1/244

1/245

1/246

1/247

1/248

1/249

1/250

1/251

1/252

1/253

1/254

1/255

1/256

1/257

1/258

1/259

1/260

1/261

1/262

1/263

1/264

1/265

1/266

1/267

1/268

1/269

1/270

1/271

1/272

1/273

1/274

1/275

1/276

1/277

1/278

1/279

1/280

1/281

1/282

1/283

1/284

1/285

1/286

1/287

1/288

1/289

1/290

1/291

1/292

1/293

1/294

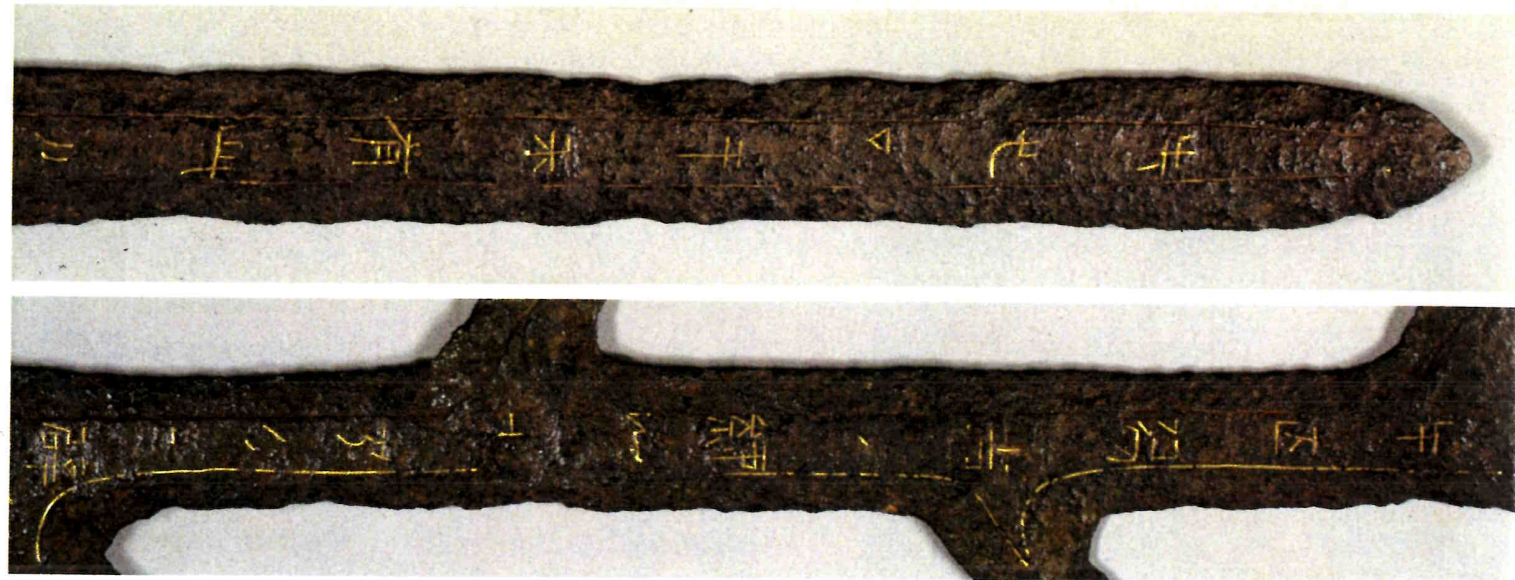
1/295

1/296

1/297

1頁全面に、限後一杯
大主に掲載下さい。

2,542^P - 2/3



七支刀 (古から表・裏・表部分・裏部分)
長さ 74.8 cm 古墳時代 国宝
(複製) 剣身の左右に、それぞれ3本ずつのハ刺を段違いに作りだす。神庫に「六又
鉄」の名前で伝世した。身の両面には、次の銘文を金象嵌であらわす。
(表) 泰和四年四月十六日丙午正陽造百練師七支刀百兵官供侯王□□□□作
(裏) 先世以来未有此刀百濟田世□□奇生聖昔故為倭王旨造□□□□世
現在では、銘文の年号を「泰和四年(369)」と読み(泰和は中国東晋の年号で太和)、
「日本書紀」神功皇后49年の、「百濟の昔古王と王子貴須が倭に忠誠を誓い、七
枝刀と七子鏡などの重宝を献上した」という記事に対応させるのが通説となつて
いる。

1404 写真図版 411 石上神宮所蔵
1309 石上神宮 神社総行(8) 学習研究社
2003年1月20日発行 21頁参照

2799^P - 1/2 18
2799^P - 1/2 18
2799^P - 1/2 18

由29/13^{1/2} 近前王
 「史料による日本の歩み」20^P 由2538^P 高橋孝比使者を送つた 三田史記(2) 314^P
 「大王の世紀」156^P 158^P 東晋 317~420^P 「後の王」24^P
 「後の王」藤内牛大 110^P 107^P 28^P 東晋 351^P
 (改行) 317^P 東晋 317^P
 晋 1140^P 2508^P

紀
上田正昭 ①
小学館、
一五六—一六一頁参照)

① 表——「東晋の泰和四年（三六九）□月十
 のような意味なのかも知れない。
 ② 七枝刀（七支刀）の銘文は、あるいは以下
 のような意味なのかも知れない。
 □ 日の日中 正午の時に、百鍊の鉄の七支（枝）
 刀を造る。以つて百兵を辟除す。宜しく侯王
 （東晋の大名格である倭王）に供供すべし。
 □ □ □ 作
 ③ 裏——「先世以来未だ見なかつたこのよう
 な刀を、百済王と太子とは、生を御恩に依倚
 してゐるが故に、倭王曰旨の爲に造る。永
 く後の世に伝わるであらうし
 ・なお、栗原朋信代は、旨を倭王に伝へ、
 天皇の御代とする。（日本の歴史）大王の世

藤内大「倭の五王」394 元神前
369年七枝刀 25

2.543^P - 1/3

天つき
改訂

紀上362^P

藤間鉄 107^P

また、西田長男氏は、
「七枝刀銘文の旨は、趣旨の旨で
く、人名である」という。
西田長男氏は、
判読できるとい、
（と）の誉と同義の異字か、去来紗別（応神の
和名）のZA乃至SAのいかれかを字したも
のと見ている
西田長男氏に、
宋書倭国伝に記されてい
る讚と、七枝刀銘文中の倭王とは、同一人物
なのであろうと考えている。という。（「倭
の五王」藤間生大、岩波新書、一〇七頁参
照）
とはいえ、参考的に述べると、七枝刀の銘
文にみられる旨を、趣旨の旨と解釈し
て、
「百濟王と太子とは、生命を御恩に依存し
ているが故に、倭王の御旨によって造った
と読みとる見解もある。（「倭の五王」藤間

④ 2544^{P-2/3} 1829
 3所 (2524)
 9所 (3724か?)

原記(本) 276^P
 (大國主) 記(皇) 192^P
 國主 ④ 2484^{P-2/3} 2,543^{P-2/3}

「世系」は ④ 2544^{P-2/3} に用いる
 see/利表 (20)

② 功紀五十二年九月条に当ると考えられる。
 大鏡は、七子鏡(同神功紀五十二年)
 ① 横刀は、石上神宮所蔵の七枝刀(神)
 ここに記されている横刀及び大鏡について、
 古王は横刀また大鏡を貢上りきし
 阿知吉師は、阿直の史等が祖そ
 阿知吉師に付けて貢上りき
 一方、古事記に神天皇条には、
 百済の国主照古王、牡馬壹正・牝馬壹正
 をもちて、阿知吉師に付けて貢上りき
 又、阿知吉師は、阿直の史等が祖そ
 古王は横刀また大鏡を貢上りきし
 とある。

生大、岩波新書、一〇七頁参照)
 一か、
 へ日倭王旨は、日倭王
 とであらう
 と考えた
 *
 (箕子の子孫であろうか)
 神天皇条には、
 牡馬壹正・牝馬壹正
 をもちて、阿知吉師に付けて貢上りき
 又、阿知吉師は、阿直の史等が祖そ
 古王は横刀また大鏡を貢上りきし
 とある。

2,543.^P - $\frac{3}{3}$

1147^p

枝
シ
エダ"の26

[illegible]

さらに、
心おうどん神じん記きには、
次つぎの歌うたが載のせられて

九月条）に^{あた}当るのであらう、
という。（「古事記」新潮社、一九二頁、注
十二および注十三参照）

2,544^P-1/3

泰和4年④2542^P1/2
小野里の「〇」と同様である

次頁
から

て
い
る
よ
✓

と
あ
る
。

● なお、

「本が剣で末が増え

て」とい

うこの刀は

東晋年号の太和四年（三六九）

百済王貢献の

七枝刀（石上神宮神宝）をさす

という。（「古事記」新潮社、一九一頁）注

一四参照

● また、この歌は、

「刀剣讚美から、それを帯びた大倭命の英

姿と清澄の仁徳とを讚美し、口さやさや（聴

覚と視覚とを兼ねた唯詞）でまとめあげた

ので、踐祚大嘗祭の披露の大嘗会の時に奏上

した儀礼歌である

という。（「古事記」新潮社、一九一頁）注

一五の注記参照

在位

346年 ②538¹/₂
〜375年

臣民 ②510¹/₂
〜2551¹/₃ 女大王碑

372
-369

②542¹/₃ 109

改行 ②,544¹/₃

神功紀 ②544¹/₃ 紀上 358¹/₃
②543¹/₃ 199

前頁

他方、

日本書紀には、神功皇后摂政五十

二年（二五二）九月十日条において、

一面、及び種種の重宝を献る。云々

と述べている。

●もつとも、

神功紀五十二年（二五二）を、干支二運

さげて、三十七年のことと解すべきであらう

といわれている（第一巻末尾の「年表」

三七二年）「日本書紀」上「日本古典文学大系

岩波書店、三五八頁、注三参照）

とすれば、七枚刀は、三六九年に造られ、三

年後の三七二年に倭国へもたらされた

ということになる（史料による日本の歩み」古

代編、吉川弘文館、二一頁、第一表参照）

推察するところ、

辛卯年（三三一）に、倭国は、百濟を臣民

三四六年、倭国に擁立されて、近肖古王が百濟国王となった。

東晋の泰和四年（三六九）□月□日の日

②542¹/₃
109

H 30 (2018) 6, 25 (A) ~ 6, 26 (4回)
 H 31 (2019) 2, 5 (A) ~ 2, 5 (3回)

2,544^P-3/3

372
 369
 3

「新」(1)本408P

2540^P-2/3
 149 2万
 149 3万

2542^P-1/2

F 2/5
 2/5

*

中^{ちゆう}正^{しやう}午^ごの時^{とき}に^ニ倭^{やマト}王^{わう}曰^い旨^{しめ}曰^い（^{あうじん}天^{てん}皇^{わう}）の爲^{ため}
 に^ニ曰^い七^{しち}枝^し刀^{とう}曰^いを造^{つく}つた。
 原^{げん}王^{わう}が二^に三^{さん}万^{まん}の軍^{ぐん}を率^{りつ}りて百^{ひやく}濟^{さい}の短^{たん}壤^{じやう}にまで
 も侵^{しん}攻^{こう}してきた。
 一^{いっ}か^かし、百^{ひやく}濟^{さい}軍^{ぐん}は、高^{かう}句^く震^{しん}軍^{ぐん}を撃^う破^はした。
 其^{その}の三^{さん}年^{ねん}後^ごの三^{さん}七^{しち}二^に年^{ねん}に^ニ曰^い七^{しち}枝^し刀^{とう}曰^いを倭^{やマト}国^{こく}に
 献^{けん}つた、百^{ひやく}濟^{さい}の近^{きん}肖^{しやう}古^こ王^{わう}は
 といつた経^{けい}緯^いがあつたの^たう^うと思^{おも}わぬ。

百^{ひやく}濟^{さい}の近^{きん}肖^{しやう}古^こ王^{わう}は

千支の繰り上げ

■「日本書紀」は「百濟からの七枝刀献上」について「何故千支を二運（二二〇年）繰り上げて記述しているのだろうか。」

■「その理由の詳細は「明らかでない」

■「しかし、次のように考えてみたい。

①一つ。「古事記」では、元神天皇の御世に七枝刀が献上された、と記されている。

・とはいうものの「日本書紀」の執筆者達は「どうしても」

「神功皇后」「天照大神」の御世に、百濟か

ら七枝刀が献上された

と述べたかったのであろう。（第一表参照）

②二つ。千支は六十年毎に繰返し繰返す

てくるので、実に煩雑極まりない。

「ついつい、誤って記述した」

「思い違いは誰にでもあるべし」

にも間違えてしまったのだし

「千支二運違ったとしても、編纂者のみに

その責任を押しつけることはない。口誤

りには誰にでもあることであり、いわば仕方

あき 明らか 元21^P

虚構 小林 855^P
つくりごと
つくりばなし
2,546^P-1/3

よく 二 小林
錯誤 902^P 元上 359^P 360^P

「小町」
71^P 上段

のなりのことなのだ。たまたま、つづいて、
まいてや古い昔のことであり、資料も定か
でないものだから、とりまぎれて混乱しただ
けのことだ。
といった弁明の言葉が聞えてきそうである。
③ 三つ。諸外国の記録と突き合せて考察すべ
ば、神功皇后紀摂政五十二年、六十五年条が
干支二運（二〇年間）早まって、
当然ながら、極めて容易に判る。
正史ともあろう書物に本来、このような杜
撰な記述などなされる筈が無いや。
・ しかし、幼稚の上にならうとはいえず、こ
んなにも単純明快な誤りをあえて犯して記載
しておけば、
を通に見られる虚構を、ますます混乱させ
るのに役立つ、と考えられただけではなからう
か。
・ はるかな後代において、必ずや誰か
か、このあきらかな干支二運の違いに気が付く
だろう。気が付かないわけがない。

その
まじく
まじく

次頁 68
答は
③ 2547^P-1/5
わけ
二頁 118

当然
前頁

注
前頁
笑
わけ
来

必
然

こと

2.546^p-2/3

せいせい
是正 1243

●その時。いわけ必然的な成りゆきとして、

「文字の無い往古のこととはいえ、どう

して、千支二渾の差異が生じたのだろうか

といった興味深い疑問が沸き起り、学者達

の注意は、この「千支二渾の違」に強く引

きつけられることだろう。

●そして、千支二渾の誤りを正して物事を考

え直そうとする動きが出てくることであらう。

●とはいえ、千支二渾を修正する単純作業だ

けでは、とうてい「日本書紀」の複雑極まり

ない虚構を解きほぐせるものではない。

●千支二渾を是正したとしても、「日本書紀

の解明には、なおほど遠く、いよいよもって

不可解さが増してゆくに相違ない。

●すなわち、

「千支二渾」の「誤り」は——後代の学者達が

$\textcircled{2541}^{P-1/2}$ 1059 $\textcircled{2544}^{P-3/3}$ 399
 369 9月 $2.546^{P-3/3}$

虚構を解きあかそうとする際の「牆壁」にな

り得る

と判断されたの
~~を~~
うう
と推察される。

■ なお、第一巻末尾の「日本書紀」
「年表」を見

とる

と違^{ちが}って、干支^{かんし}がずらされて
いる。近傍^{きんぼう}の記事

高句麗と百濟との絶え間のない攻防

三國史記 (現存最古の朝鮮の史書) の「高句麗本」
 紀しおよび「百濟本」の「記事」の中から、

三六九年九月以降、四〇〇年頃
 迄^{まで}ひつ^{はけ}さき^{せき}なり^{いもうち}に繰^くり返^{かえ}された高句麗^{ミョウリ}と百^{ひゃく}濟^{せい}との戦^{いくさ}い^いに^いつ^いて、年^{ねん}次^じを追^おって拔^{はく}粋^{すい}してみる^{みる}こと^{こと}に^によう^{よう}。

決^{けつ}して相^あ譲^{ゆず}らず[！]。
 絶^たえ^ま間^まの^{ない}。
 攻^{こう}防^{ぼう}戦^{せん}に^あ

けくれていた様子を読みとれる。
 ■なお、ここに述べる年代は、必ずしも実年
 代を示しているとはいえないようだが、
 三国史記に記述されている通りの年月を
 あるがままに書き写してみたい。

●先述のとおり、三六九年九月、高句麗
 は突然にも百濟への侵攻を開始した。

●しかし、百濟軍は、高句麗軍に大打撃を
 えて撃破した。

■二年後の三十七年にも、高句麗軍が大挙
 して百濟へ攻めて来た。

●百濟の近肖古王は、これを聞いて、涇河(板
 門)の南を西流する臨津江かというのほと
 りに伏兵をおき、高句麗軍の到着を待つて、
 こゝを急襲した。高句麗軍は敗北した。(近
 肖古王、二十六年条参照)

■同年(三七一)冬十月、戦勝に勢いづいた

神537
好隣
吳王
リ

1か
然るに948^ア
とせよのに。

2,547^ア - 2/5

せんたい 元1270^ア
先代 前の時代
小村末99^アも
北朝に442^ア年

472
371
/01

きり 元511^ア
魏 386年
493年に洛陽へ遷都

近肖古王
(^{きんしょうこ}王)

百濟王は、自ら三万の軍隊を率いて、平壤城を攻撃した。

・高句麗の故国原王は、軍勢を従えて防戦した。

たが、流矢にあたり、この月二十三日に薨去した。そこで王を故国の原に埋葬した。

(故国原王、四十一年十月条参照)

※もつとも、約百年後の四七二年、百濟の蓋鹵王が魏朝見した時の上表文には、次のように記されてゐる。

臣は、高句麗王と同じように、出自が扶餘です。先代(前の時代)のときまで、旧くからのよしみをとくに尊重してきました。

然るに、高句麗の祖先の剣(故国原王)は、軽々しく好隣を捨て、自ら軍隊を率いて、臣の国境を踏みあらしました。

臣の祖先の須(近肖古王)は、兵を整え、稲妻のように進撃し、機に乗じて出撃し、矢や石を撃ちあいました。そしてついに、剣の首を斬り、さらし首になりました。云々

とある。(蓋鹵王の十八年条参照)

三〇史記「第二十六代」

2,547^{P-3/5}

圖同年(三七一)故国原王が薨去したので
太子が王位に即いた。小獸林王である。(小
獸林王、元年条参照)
小獸林王の二年(三七二)六月、秦王の符
堅が、使者および浮屠(僧侶)の順道を高句麗
に派遣し、仏像や経文を送ってきた。小獸林王
は、使節を派遣して答礼し、土産物を貢納し
た。(小獸林王、二年条参照)
※なお、
(1)符堅(苻堅)は、中国五胡十六国の前秦第
三代の王、在位は三五七―三八五である。王
猛の補佐により、前秦の最盛期をすぎた。
(2)「仏像や経文を送ってきた」というこの記
事は、仏教が正式に朝鮮へ伝来したことを伝
える最初の記録である。前秦が高句麗に積極
的に接近したのは、燕に対抗するためであっ
た、
という。(「三国史記」(2)金富軾、井上秀雄
訳注、一四三頁注三三。一四四頁注三四参
照)

125 QM1

$$2,547^{\text{p}} - \frac{4}{5}$$

初回は20頁右

四 一方、百済の黄金期ともいうべき同年（三
 七）の正月に、百済の近肖古王は、使者を
 東晋に派遣し、朝貢させた。近肖古王、二
 十七年正月条参照）
 ※この外交は、晋書卷九簡文帝紀、咸安
 二年（三七）正月条の「百済、使をつか
 めて、方物を献ず」同年六月条の「東晋
 を遣わし、百済王余句（近肖古王）を拜し、
 鎮東將軍領東浪太守」と為す」という記事
 に承応する。へ「倭の五王」藤原生大、岩波
 新書、一一五頁。「三国史記」(2)金富軾、東
 洋文庫、平凡社、三一四頁、三二一頁注四二
 参照）
 四 三七三年二月、百済は、東晋に派遣し、朝
 貢させた。（近肖古王、二十八年二月条参照
 ・百済は東晋から百済へやってきた使者を
 送り返し、再度朝貢したのであらう。
 四 三七五年七月、高句麗が、百済の北部境
 の水谷城（黄海道新溪郡多栗面）を攻めおと
 した。百済の近肖古王は將軍を派遣して反撃
 した。百済が勝てなかつた。近肖古王は、再
 度、不

2,547^{P-5/5}

三史記(2) 316^P

⊕2541^{P-1/2} 4件

作のため果^{はた}せなかつた。(近肖古王、三十年

七月条参照)

・つまり、三七五年七月以前の百済の北^{ほく}郡^{ぐん}

辺境の国境は、平壤とソウルのほぼ中間に位置

する黄海北道^{新溪の北方にあつた}新溪の北方にあつた(ミとが分

る。

三七五年十一月に、百済の近肖古王が薨去

したので、太子が王位に即いた。近仇首王で

ある。(近仇首王、元年条参照)

三七六年十一月、高句麗の小獸林王は、百

済の北辺を侵略した。(小獸林王、六年十一

月条。近仇首王、二年、十一月条参照)

三七七年十月、百済の近仇首王は、三万の

軍隊を率いて、高句麗の平壤城を侵攻した。

(近仇首王、三年十月条参照)

同年(三七七年)の十一月、高句麗王は、南

進して、百済を討伐した。(小獸林王、七年

十一月条参照)

三七九年三月、百済王は、使者を東晋に朝

貢させようとした。しかし、その使者は、海

上で悪風にあい、中国へ到達せず、還つてきた。(近仇首王、五年三月条参照)
三〇三八四年四月、近仇首王が薨去したので、嫡男の枕流王が王位に即いた。(枕流王、元年条参照)
三〇四〇年(三八四)七月、百済の枕流王は、使者を東晋に派遣して朝貢した。(枕流王、元年七月条参照)
三〇四〇年(三八四)九月、胡僧の摩羅難陀が晋から来たので、百済王はこれを宮殿内に迎え入れ、礼式をもって敬った。百済の仏法は、このときから始まる。(百済の枕流王、元年九月条参照)
三〇四〇年(三八四)十一月、高句麗の小獸林王が薨去したので、小獸林に埋葬し、小獸林王と諡した。
・小獸林王に嗣子がなかったので、王弟が王位に即いた。故国壤王である。(故国壤王、元年条参照)
三〇四五年十一月、百済の枕流王が薨去した

市2539°-1/3
 百市由2550°-1/3
 聖後太子の遺策
 姪男

三〇史記(1)の
 末の地図 2,549°-1/2

あひ
 阿草王
 市2550°-1/3 14

●その時、枕流王の太子が幼少だったので、
 枕流王の弟が王位に即いた。辰斯王である。
 (百濟の辰斯王、元年条参照)
 三十八年八月、高句麗の故国壤王は、軍隊
 を南方にすすり、百濟を討伐した。(故国壤
 王、三年八月条参照)
 三十八年九月、百濟の辰斯王は、出兵して
 高句麗の南部辺境を侵略・掠奪した。(百濟
 の辰斯王、五年九月条参照)
 三十九年九月、百濟の辰斯王は、達率の真
 嘉謨に高句麗を討伐させた。真嘉謨は、都坤
 城(平南中和郡中和面、平壤の南二〇ギ)を
 略して、捕虜二百人を得た。辰斯王は、真
 嘉謨を兵官佐平に任命した。(百濟の辰斯王
 六年九月条参照)
 三十九年春、高句麗は、使者を新羅に派遣
 して国交を開いた。新羅王は、姪(甥)の夷
 聖を人質として派遣してきた。
 同年五月、高句麗の故国壤王が薨去したので、
 故国壤に埋葬し、故国壤王と諡した。
 太子が王位に即いた。広開土王(在位三九
 一)以後の出来事である。

同文
④ 2997-1/3

こでは改行ない。(改行は2~3行
参考の巻)

1620 2.549P-3/2

永樂5年 395年
1年 391年

親文後96'末2行
6年丙申とある。丙申は年表が
396年であることか分る。
作て永樂元年は 391年とある。
H17.1.7④

④
2551-3/3
1657

なっており

二(四一三)である。(高句麗の故国壤王、
九年五月条。玄開土王、元年条参照)
ただ、玄開土王陵碑によれば、この前
年の辛卯年(三九一)即位したことになる。
ていから、碑文とは一年の差異がある。
(「三国史記」(2)金富軾、井上秀雄訳注、東
洋文庫、平凡社、一四五頁、注五三参照)
玄開土王の永樂元年は三九一年である
同年(三九二)七月、高句麗の談徳(玄
開土王)は、四万の軍隊を率いて、百濟の北
部辺境へ侵入し、石峴城など十余城を陥れた。
百濟の辰斯王は、談徳(玄開土王)が用兵
に秀れていると聞いていたので、城を出
て戦うことができなかった。
そのため、漢水(漢江)の北の諸部落の多
くが、高句麗に奪われた。(百濟の辰斯王、
八年七月条参照)
同年(三九二)十月、高句麗の玄開土王は
百濟の閔彌城を攻めおとした。その城の四方
は絶壁と海水に取り囲まれていたが、玄開

160

コクヨ ケー70 20X20

(第7巻) 210

令和4(2022)
3.5内田

こ

385年11月
2549-1/2
1~255
385年

2.550^P-1/3

土王は、軍隊を七道に分け、二十日間攻撃して、ついに陥落させた。(高句麗の広開土王元年十月条参照)

*なお、百濟の閼彌城は、広開土王碑の永樂六年条に閼彌城と記述されているものである。

その現地比定には、黄海道延白郡海面姑美里説と、その対岸の京畿道江華郡喬洞面華蓋山説とがある。

という。ハ「三国史記」(2)金富軾、井上秀雄

訳注、東洋文庫、平凡社、一四六頁、注五五

参照)

周年(三九二)十一月、百濟の辰斯王が薨去した。枕流王の嫡男が王位に即いた。阿莘王である。(百濟の阿莘王、元年条参照)

三九三年八月、百濟は高句麗南部の辺境へ侵入し、閼彌城を包囲した。高句麗軍は籠城して固守した。百濟軍は軍糧の補給路が途切れたので引き返した。(広開土王、二年八月

条。阿莘王、二年八月条参照)

この頁11行、15行 古代朝鮮 75

395年

と対するかい?

三ノ口に上 146

2,550^P-3/3

三ノ口に(2)326^P

入 ぬき 板の 精緻な
2797-73

三九四年七月、百済が、(高句麗の)水谷城下へ侵入して来たので、(高句麗の)広開土王は精強な騎馬隊五千人を率いて迎え撃ち、これを破った。残りの敵も夜になつて敗走した。(広開土王、三年七月条参照)

同年(三九四)八月、高句麗は国の南部に七城を築き、百済の侵入に備えた。(広開土王、三年八月条参照)

三九五年八月、百済の阿莘王は、左将の真武らに高句麗討伐を命じた。高句麗の広開土王は、自ら七千人の軍隊を率いて、湍水(大)江もくは(礼成江)のほとりに陣どり、防戦した。百済軍は大敗し、死者八千人をだし、た。(百済の阿莘王、四年八月条参照)

*もつとも、(高句麗の)広開土王は百済と湍水のほとりで戦い、大敗させ、八千余人を捕虜にした、ともいう。(高句麗の)広開土王、四年八月条参照)

同年(三九五)十一月、百済の阿莘王は、さきの湍水の戦いに報復しようと企図し、自ら七千人の軍隊を率いて、漢水(漢江)を渡り

を引き連れ

と企図して

新羅 2549 P-1/2 末

2549 P-1/2 末尾に記された。

新羅 96 P-2554

2828 P-1/2

2,550 P-3/3

2814 P-3/2

2554 同文

2827 P-4

大石
カンザン 城

次頁から

来事である。
*尚下
三九一
以後の出

条参照

とある。
（広開土王陵碑、永樂六年（三九六）

凱旋した

高句麗軍は「百濟」王の弟などを人質として

ことを誓った。

百濟王は、多くの貢物を出し、家臣となる

王城を攻めた。

計ち、多くの城（五十余城）を占領した。

一かーなお抵抗があつたので、漢江を渡り

三九六年、王は躬ら水軍を率いて百濟国を

次のようにに記されてゐる。

参考迄に述べると、曰広開土王陵碑には

今、京畿道広州とする説が有力

（百濟の阿莘王、四年十一月条参照）

し、漢山城についで、士卒をねぎらつた。

の士卒が凍死した。そこで、軍隊をひきかえ

青木嶺の麓でやどつたが、大雪にあり、多く

の士卒が凍死した。そこで、軍隊をひきかえ

ニと

紀上366°
宇治谷上197°
村上(上) 322°

2,551° - 1/3

「5月条と3月条」の2冊 広内土正平
398年条 ④2555° - 1/3
差については決まらず
陰暦と陽暦の差ではない。

277
120
397

前頁

三九七年五月、百濟の阿莘王は、倭国と好
 (国交)を結び、太子の腆支を人質とした。
 (百濟の阿莘王、六年五月条参照)
 ※一方、日本書紀に元神天皇八年(二七七
 年、但し二運繰り下げると三九七年)三月条
 には次のように記されている。

八年春三月、百濟人が来朝した。
 百濟記に阿花王が立つて貴国(倭国)に無
 礼をした。それで、わが枕彌多禮、及び
 支侵・谷那・東聲の地を奪われ、是を以て
 王子直支を天朝に遣して、先王の好を修交し
 た。とある。

家臣になると誓ったこと

無礼とは、高句麗に対する屈從をさして
 いるのであろう。

という。(日本書紀(上)日本古典文学大系

大正1821°
腆支(アヒ)

えきむ 役務 云 234^p

2,551^p-2/3

前 189^p

ゆ 説 びる 云 2381^p

いんぎ 信義 云 1143^p

2544^p-2/3
2544^p-2/3 19^p

岩波書店、三六六頁、注七参照)

※恐らく、

●辛卯年(三三一)に、倭国は、百済を臣民

●三四六年倭国が後ろ盾となつて、近肖古王を百濟国王とした

●三九六年に、百濟王は、倭国との信義にそ

むき、高句麗に屈従して家臣となることを誓

つた。

●そこで、翌三九七年に、

「百濟の阿花王(阿莘王)は、倭国に無礼

高句麗への屈従)を詫び、三四六年(近肖古即位の年)以来の

好を修交した

ということなのであろうと解される。

●三九九年八月、百濟の阿莘王は、高句麗を

侵攻しようと思ひ、大々的に兵士や馬を徴発

した。そのため、その役務に苦しんで、新羅

H30(2018)6.25(月)~6.26(4回)
令和2(2020)2.19(火)~2.21(4回)

おか
侵す 285^p

2,551^P-3/3

三〇史記(2)130^p
五千余戸とある？

2/21 1/20
2/20

へ逃げる者が多く、戸数や人口がひとく減つた。(百済の阿莘王、八年八月条参照)
四〇〇年正月、高句麗の広開土王は、使者を燕に派遣し、朝貢した。
・二月、燕王の盛は、高句麗王が燕にたいする儀礼を怠って、高句麗を襲撃し、新城・南の軍隊を率いて、高句麗を襲撃し、新城・南蘇二城を攻略し、七百余里の土地を奪い、五千余人を連れ帰国した。
四〇四年十一月、高句麗の広開土王は、出兵して燕を侵した。
四〇五年正月、燕王熙(在位四〇一~四〇七)が遼東城(中国遼寧省遼陽市)を攻め、まさか落城しようとした。しかし、燕軍は、ついに勝てずに帰った。
四一三年十月、高句麗の広開土王が薨去した。太子が王位に即いた。長寿王である。(73
国史記(2)金富軾、井上秀雄訳注、東洋文庫
平月社、一三〇一~三一頁参照)
米